

谷

宮沢賢治

青空文庫

檜ならわたり 渡わた のとこの崖がけはまっ赤でした。

それにひどく深く急でしたからのぞいて見ると全くくるくるするのでした。

谷底には水もなんにもなくてたゞ青いこすゑ梢しらかばと白樺などの幹が短く見えるだけでした。

向ふ側もやっぱりこつち側と同じやうでその毒々しく赤い崖には横に五本の灰いろの太い線が入つてゐました。ぎざぎざになつて赤い土から喰はみ出してゐたのです。それは昔山の方から流れて走つて来て又火山灰に埋うづもれた五層の古い熔岩流ようがんりゅうだつたのです。崖のこつち側と向ふ側と昔は続いてゐたのでせうがいつかの時

代に裂けるか罅われるかしたのでせう。霧のあるときは谷の底はま
つ白でなんにも見えませんでした。

私をはじめてそこへ行つたのはたしか尋常三年生か四年生のこ
ろです。ずうつと下の方の野原でたつた一人野葡萄のぶだうを喰べてるま
したら馬番の理助が鬱金うこんの切れを首に巻いて木炭すみの空俵をしよつ
て大股おほまたに通りがかったのでした。そして私を見てずるぶんな高
声で言つたのです。

「おいおい、どこからこぼれて此処ここらへ落ちた？　さらはれるぞ。
藪きのこのうんと出来る処へ連れてつてやらうか。お前なんかには持て
ない位藪のある処へ連れてつてやらうか。」

私は「うん。」と云いひました。すると理助は歩きながら又言ひ

ました。

「そんならついて来い。葡萄などもう棄てちまへ。すつかり唇も齒も紫になつてる。早くついて来い、来い。後れたら棄てて行くぞ。」

私はすぐ手にもった野葡萄の房を棄ていっしんに理助について行きました。ところが理助は連れてつてやらうかと云つても一向私などは構はなかつたのです。自分だけ勝手にあるいて途方もない声で空に嘯ぶりつくやうに歌って行きました。私はもうほんたうに一生存けんめいについて行つたのです。

私どもは柏かしはの林の中に入りました。

影がちらちらちらちらして葉はうつくしく光りました。曲つた

黒い幹の間を私どもはだんだん潜くぐって行きました。林の中に入ったら理助もあんまり急がないやうになりました。又じつさい急げないやうでした。傾斜もよほど出てきたのでした。

十五分も柏の中を潜ったとき理助は少し横の方へまがってからだをかゞめてそこらをしらべてゐましたが間もなく立ちどまりました。そしてまるで低い声で、

「さあ来たぞ。すきな位とれ。左の方へは行くなよ。崖だから。」

そこは柏や檜の林の中の小さな空地でした。私はまるでごくごくしました。はぎぼだしがそこにもこゝにも盛りになつて生えてゐるのです。理助は炭俵をおろして尤もつともらしく口をふくらせてふうと息をついてから又言ひました。

「いゝか。はぎぼだしには茶いろのと白いのとあるけれど白いのは硬くて筋が多くてだめだよ。茶いろのをとれ。」

「もうとつてもいゝか。」私はききました。

「うん。何へ入れてく。さうだ。羽織へ包んで行け。」

「うん。」私は羽織をぬいで草に敷きました。

理助はもう片っぱしからとつて炭俵の中へ入れました。私もとりました。ところが理助のとるのはみんな白いのです。白いのばかりえらんでどしどし炭俵の中へ投げ込んでゐるのです。私はそこでしばらく呆れて見てゐました。

「何をぼんやりしてるんだ。早くとれとれ。」理助が云ひました。

「うん。けれどお前はなぜ白いのばかりとるの。」私がききました。

た。

「おれのは漬物つけものだよ。お前のうちぢや蕈きのこの漬物なんか喰べないだらうから茶いろのを持って行つた方がいゝやな。煮て食ふんだらうから。」

私はなるほどと思ひましたので少し理助を気の毒なやうな気もしながら茶いろのをたくさんとりました。羽織に包まれないやうになつてもまだとりました。

日がたつて秋でもなかなか暑いのでした。

間もなく蕈も大ていなくなり理助は炭俵一ぱいに詰めたのをゆるく両手で押すやうにしてそれから羊齒しだの葉を五六枚のせて繩なはで上をからげました。

「さあ戻るぞ。谷を見て来るかな。」理助は汗をふきながら右の方へ行きました。私もついて行きました。しばらくすると理助はぴたつととまりました。それから私をふり向いて私の腕を押へてしまひました。

「さあ、見ろ、どうだ。」

私は向ふを見ました。あのまつ赤な火のやうな崖がけだったので。私はまるで頭がしいんとなるやうに思ひました。そんなにその崖が恐ろしく見えたのです。

「下の方ものぞかしてやろうか。」理助は云ひながらそろそろと私を崖のはじにつき出しました。私はちらつと下を見ましたがもうくるくるしてしまひました。

「どうだ。こはいだらう。ひとりで来ちやきつところへ落ちるか
ら来年でもいつでもひとりで来ちやいけないぞ。ひとりで来たら
承知しないぞ。第一みちがわかるまい。」

理助は私の腕をはなして大へん意地の悪い顔つきになって斯^か
云ひました。

「うん、わからない。」私はぼんやり答へました。

すると理助は笑つて戻りました。

それから青ぞらを向いて高く歌をどなりました。

さっきの蕈を置いた処へ来ると理助はどっかり足を投げ出して
座つて炭俵をしよひました。それから胸で両方から繩^{なは}を結んで言
ひました。

「おい、起して呉れ。」

私はもうふところへ一杯にきのこをつめ羽織を風呂敷包みのやうにして持つて待つてゐましたが斯う言はれたので仕方なく包みを置いてうしろから理助の俵を押しやりました。理助は起きあがつて嬉しうれさうに笑つて野原の方へ下りはじめました。私も包みを持つてうれしくて何べんも「ホウ。」と叫びました。

そして私たちは野原でわかれて私は大威張おほあばりで家に帰つたのです。すると兄さんが豆を叩たたいてゐましたが笑つて言ひました。

「どうしてこんな古いきのこばかり取つて来たんだ。」

「理助がだつて茶いろのがいゝつて云つたもの。」

「理助かい。あいつはずるさ。もうはぎぼだしも過ぎるな。おれ

もあしたでかけるかな。」

私も又ついて行きたいと思ったのですが次の日は月曜ですから仕方なかったのです。

そしてその年は冬になりました。

次の春理助は北海道の牧場へ行つてしまひました。そして見るとあすこのきのこはほかに誰かたれに理助が教へて行つたかも知れませんがまあ私のものだったのです。私はそれを兄にもはなしませんでした。今年こそ白いのをうんととつて来て手柄を立ててやらうと思ったのです。

そのうち九月になりました。私ははじめたつた一人で行かうと思つたのですがどうも野原から大分奥でこはかつたのですし第

一どの辺だったかあまりはつきりしませんでしたから誰か友だちを誘はうときめました。

そこで土曜日に私は藤原慶次郎にその話をしました。そして誰にもその場所をはなさないなら一緒に行かうと相談しました。すると慶次郎はまるでよろこんで言ひました。

「ならわたり櫛渡なら方向はちゃんとわかつてゐるよ。あすこでしばらくすみ木炭を焼いてゐたのだから方角はちゃんとわかつてゐる。行かう。」

私はもう占めたと思ひました。

次の朝早く私も今度は大きな籠かごを持ってでかけたのです。

実際それを一ぱいとることを考へると胸がどかどかするのです。

ところがその日は朝も東がまつ赤でどうも雨になりさうでした
が私たちが柏かしはの林に入ったところはずるぶん雲がひくくてそれにぎ
らぎら光つて柏の葉も暗く見え風もカサカサ云つて大へん気味が
悪くなりました。

それでも私たちはずんずん登つて行きました。慶次郎は時々向
ふをすかすやうに見て

「大丈夫だよ。もうすぐだよ。」と云ふのでした。実際山を歩く
ことなどは私よりも慶次郎の方がずうつとなれてゐて上手でした。
ところがうまいことはいきなり私どもははぎぼだしに出でつ会く
しました。そこはたしかに去年の処ではなかつたのです。ですか
ら私は

「おい、こゝは新らしいところだよ。もう僕らはきのこ山を二つ持ったよ。」と言ったのです。すると慶次郎も顔を赤くしてよろこんで眼めや鼻や一緒になってどうしてもそれが直らないといふ風でした。

「さあ、取つてかう。」私は云ひました。そして白いのばかりえらんで二人ともせつせと集めました。昨年のことなどはすっかり途中で話して来たのです。

間もなく籠かごが一ぱいになりました。丁度そのときさつきからどうしても降りさうに見えた空から雨つぶがポツリポツリとやつて来ました。

「さあぬれるよ。」私は言ひました。

「どうぞせざるぬれだ。」慶次郎も云ひました。

雨つぶはだんだん数が増して来てまもなくザアツとやって来ました。檜ならの葉はパチパチ鳴りしづく雫の音もポタツポタツと聞えて来たのです。私と慶次郎とはだまって立ってぬれました。それでもうれしかったのです。

ところが雨はまもなくぱたつとやみました。五六つぶを名残なごりに落してすばやく引きあげて行ったといふ風でした。そして陽ひがさつと落ちて来ました。見上げますと白い雲のきれ間から大きな光る太陽が走って出てゐたのです。私どもは思はず歓呼の声をあげました。檜かしはや柏かしはの葉もきらきら光ったのです。

「おい、こゝはどの辺だか見て置かないと今度来るときわからな

「いよ。」慶次郎が言ひました。

「うん。それから去年のもさがして置かないと。兄さんにでも来て貰もらはうか。あしたは来れないし。」

「あした学校を下つてからでもいゝぢやないか。」慶次郎は私の兄さんには知らせたくない風でした。

「歸りに暗くなるよ。」

「大丈夫さ。とにかくさがして置かう。崖がけはぢきだらうか。」

私たちは籠はそこへ置いたまま崖の方へ歩いて行きました。そしてたらまだまだと思つてゐた崖がもうすぐ目の前に出ましたので私はぎくつとして手をひろげて慶次郎の来るのをとめました。

「もう崖だよ。あぶない。」

慶次郎ははじめて崖を見たらしくいかにもどきつとしたらしくしばらくなんにも云ひませんでした。

「おい、やっぱり、すると、あすこは去年のところだよ。」私は言ひました。

「うん。」慶次郎は少しつまらないといふやうにうなづきました。「もう帰らうか。」私は云ひました。

「帰らう。あばよ。」と慶次郎は高く向ふのまつ赤な崖に叫びました。

「あばよ。」崖がけからこだまが返つて来ました。

私にはかに面白くなつて力一ぱい叫びました。

「ホウ、居たかあ。」

「居たかあ。」崖がこだまを返しました。

「また来るよ。」慶次郎が叫びました。

「来るよ。」崖が答へました。

「馬鹿^{ばか}。」私が少し大胆になって悪口をしました。

「馬鹿。」崖も悪口を返しました。

「馬鹿野郎」慶次郎が少し低く叫びました。

ところがその返事はたゞごそごそつとつぶやくやうに聞えました。どうも手がつけられないと云ったやうにも又そんなやつらにいつまでも返事してゐられないなど自分ら同志で相談したやうにも聞えました。

私どもは顔を見合せました。それから俄^{には}かに恐^{こは}くなつて一緒に

崖をはなれました。

それから籠かごを持ってどんどん下りました。二人ともだまってどんどん下りました。雫しづくですっかりぬればらや何かに引つかゝれながらなんにも云はずに私もはどんどん遁にげました。遁にげれば遁にげるほどいよいよ恐おそくなったのです。うしろでハツハツハと笑ふやうな声もしたのです。

ですから次の年はたうとう私たちは兄さんにも話して一緒にでかけたのです。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第九卷」筑摩書房

1979（昭和54）年7月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年2月20日初版第5刷発行

底本の親本：「校本宮沢賢治全集」筑摩書房

入力：田代信行

校正：伊藤時也

2000年9月13日公開

2005年10月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

谷
宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>